

学生要望調査結果に基づく英語カリキュラムの現状と課題についての一考察

A Consideration on the Present Situation and Required Improvements of Our English Curriculum Based on a Student Needs Survey

亙理 陽一*

Youichi WATARI

Abstract: The purpose of this article is to examine the student survey we have conducted in July 2008 and give suggestions to improve our English curriculum. Five hundred and seventy-one lower-division course students answered the questionnaire about their English classes, their aims of learning English, requests for their teachers, and the English-related abilities they consider themselves lacking. It was quantitatively analyzed with factor and multiple linear regression analyses. The results suggested that practicality-oriented students are more inclined to study out of class, while students who are indifferent to English or want to avoid it are less likely to study out of class and tend to find their textbooks difficult and boring. It also indicated that most other students who feel they need some kinds of basic vocabulary and proficiency are much more likely to find their class size ill-balanced and their textbooks difficult. As a result, we may suggest that we should reconsider the present track system and enhance our syllabi in tandem.

1. はじめに

静岡理工科大学では現在、必修の「英語1・2・3・4」と選択の「英語ワークショップ(ReadingとCommunication, 各一コマ)1・2・3・4」および「Current English」をI類科目として、非常勤講師3名を含む7名の教員で展開している。「英語1・2・3・4」は、半期ごとにプレイスメント・テストを実施し、理工学部3学科を各2クラス、総合情報学部(2007年度入学生までは情報システム学科)を4クラスに分けている。ただし、使用するテキストは以下のように統一され、クラス・レベルに応じた指導は、語彙・構文やいわゆる四技能の熟達度に関する到達目標の違いによって具体化されている。2008年度は、一年次対象の「英語1・2」に対する共通テキストとして、理工学部3学科クラスは*General Science*(南雲堂)を、総合情報学部クラスは*Information Technology*(Oxford Univ. Pr.)を使用し、二年次対象の「英語3・4」に対しては6名中4名の教員が担当するクラスで*Guided Reading 1*および*Guided Reading 2*(Cave Books)を使用した。

このカリキュラムは、幾度かの改編を経て今日に至るものである。しかし一方で、学部構成・学生数の変動や、入学時の英語にかかわる知識・技能の分散の拡大および相対的低下により、十分に機能しているとは言えない側面もある。このことは、大局的に見れば、大学全体としてどのような英語教育をどのような方法で提供するかというグランド・デザインの再考の必要性を示している。

そこで、このカリキュラムの妥当性を吟味し、必要な改善の検討資料とすべく、2007年8月に設置された英語教育小委員会の活動方針実行計画案に基づき、学生要望調査を実施した。本報告は、この結果と分析に基づき、次年度以降のI類英語カリキュラムに対する示唆を与えることを目的とするものである。

2. 調査の対象と方法

2.1 調査対象

静岡理工科大学1年生358名、2年生259名を対象とし、各学年10クラスから有効解答者571名(92.5%)のデー

2009年2月26日受理

* 教育開発センター

Table 1 学年・学科別記述統計¹⁾

	授業の進め方		クラスの人数		教科書の内容 (難しさ)		教科書の内容 (面白さ)		授業外勉強時間 (週当たり)		N
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
一年生 総合	2.64	0.58	2.35	0.50	2.17	0.70	2.52	0.78	1.59	0.83	329
理工学部3学科総合	2.62	0.59	2.32	0.50	2.25	0.70	2.59	0.73	1.55	0.82	208
機械工学科	2.68	0.57	2.20	0.40	2.19	0.74	2.62	0.68	1.43	0.72	95
電気電子工学科	2.71	0.53	2.47	0.53	2.28	0.64	2.69	0.65	1.66	0.92	58
物質生命科学科	2.42	0.65	2.36	0.55	2.33	0.69	2.44	0.87	1.65	0.86	55
総合情報学部	2.68	0.56	2.40	0.49	2.04	0.69	2.40	0.83	1.64	0.84	121
二年生 総合	2.58	0.55	2.59	0.52	2.31	0.61	2.64	0.75	1.87	0.89	242
機械工学科	2.55	0.56	2.68	0.47	2.27	0.60	2.57	0.62	1.72	0.75	60
電気電子工学科	2.48	0.50	2.70	0.46	2.48	0.50	2.90	0.77	1.68	0.75	40
物質生命科学科	2.63	0.62	2.66	0.47	2.44	0.63	2.73	0.73	1.98	0.95	41
情報システム学科	2.61	0.53	2.47	0.57	2.23	0.63	2.54	0.80	2.00	0.95	101
全体総合	2.61	0.57	2.45	0.52	2.23	0.67	2.57	0.77	1.71	0.87	571

Table 2 授業に対する感想項目の回答内訳(割合)

	一年生 総合				二年生 総合			
	1	2	3	4	1	2	3	4
授業の 進め方	遅すぎる 1%	遅い 39%	はやい 56%	はやすぎる 5%	遅すぎる 1%	遅い 43%	はやい 55%	はやすぎる 2%
クラスの 人数	多すぎる 1%	多い 64%	少ない 35%	少なすぎる 0%	多すぎる 1%	多い 39%	少ない 60%	少なすぎる 0%
教科書 の難しさ	難しすぎる 16%	難しい 52%	やさしい 30%	やさしすぎる 2%	難しすぎる 7%	難しい 55%	やさしい 37%	やさしすぎる 1%
教科書 の面白さ	つまらない 10%	ちょっとつまらない 36%	ちょっと面白い 47%	面白い 8%	つまらない 7%	ちょっとつまらない 38%	ちょっと面白い 50%	面白い 10%
勉強時 間/週	テストのみ 60%	30分以内 25%	30分~1時間 12%	1時間以上 4%	テストのみ 42%	30分以内 33%	30分~1時間 20%	1時間以上 5%

Table 3 今後の英語の授業・学習についての質問項目の概要 (付・図)

【英語を使う目的とその予想】

項目	一年全体		二年全体	
	選択数	選択率	選択数	選択率
仕事	177	49.4%	147	56.8%
英語の論文・本を読んだり訳したりすること	127	35.5%	101	39.0%
TOEIC や TOEFL の受験	54	15.1%	40	15.4%
留学や海外での生活	50	14.0%	33	12.7%
日本で外国人とのコミュニケーション	134	37.4%	107	41.3%
英語のホームページを見ること	104	29.1%	88	34.0%
海外旅行	154	43.0%	108	41.7%
その他	11	3.1%	8	3.1%
使う機会は全くない	53	14.8%	28	10.8%

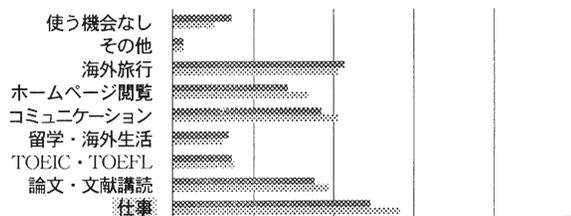
【英語教員に増やしてほしいもの】

項目	一年全体		二年全体	
	選択数	選択率	選択数	選択率
英語による指示・説明	54	15.1%	39	15.1%
視聴覚教材の利用	109	30.4%	81	31.3%
コンピュータを使った学習	79	22.1%	47	18.1%
学生が発表する活動	21	5.9%	17	6.6%
ペア・ワーク(二人一組での作業)	37	10.3%	19	7.3%
グループ・ワーク	62	17.3%	44	17.0%
ゲーム(パズルやクイズなど)	145	40.5%	90	34.7%
日本語による文法の説明	182	50.8%	138	53.3%
日本語による指示・説明	131	36.6%	107	41.3%
その他	10	2.8%	4	1.5%

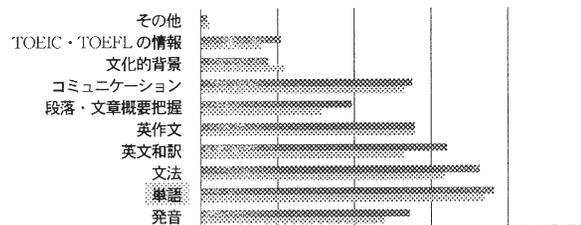
【自分に必要だと思う英語能力】

項目	一年全体		二年全体	
	選択数	選択率	選択数	選択率
発音	194	54.2%	123	47.5%
単語	273	76.3%	191	73.7%
文法	259	72.3%	164	63.3%
英文和訳	229	64.0%	137	52.9%
英作文	199	55.6%	144	55.6%
段落・文章の内容の把握	141	39.4%	81	31.3%
コミュニケーション	197	55.0%	138	53.3%
英語圏の文化的背景	62	17.3%	56	21.6%
TOEIC・TOEFLなどの知識・情報・テクニック	74	20.7%	41	15.8%
その他	5	1.4%	6	2.3%

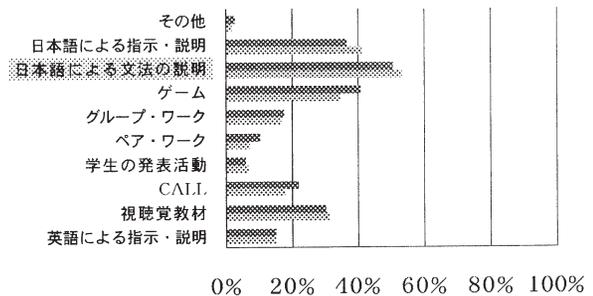
英語を使う目的とその予想



自分に必要だと思う英語能力



英語教員に増やしてほしいもの



タを得た。

2.2 質問項目

2008年6～7月に常勤4教員が、担当クラスで予備的な調査を実施し、その結果に基づく討議の上、その科目全体を振り返った授業に対する感想5項目(4点尺度)・英語を使う目的とその予想9項目(複数回答法、以下同様)・自分に必要だと思う英語能力10項目・英語教員に増やしてほしいもの10項目・自由記述欄からなる無記名式の質問紙を作成した(末尾資料を参照)。質問紙の冒頭には、参加者への教示として、「このアンケートは、英語の授業をより良くする目的で行うものです。みなさんの率直な感想・意見を聞かせてください。みなさんの成績とは無関係です。名前・学籍番号を書く必要もありません」という文章を記載した。

2.3 調査方法

2008年7月に、担当の7教員が、講義中にB4一枚からなる質問紙を配布して実施した。調査の所要時間はクラスにつき10～15分である。

3. 結果と分析

「授業に対する感想」項目についての学年・学科別の記述統計と、「英語を使う目的とその予想」・「自分に必要だと思う英語能力」・「英語教員に増やしてほしいもの」、つまり今後の授業・学習についての質問項目の概要をTable 1～Table 3に示す。

3.1 因子分析

今後の英語の授業・学習についての質問29項目に対して、主因子法による因子分析を実施した²⁾。5因子を仮定して主因子法・Varimax回転による因子分析を行い、十分な因子負荷量を示さなかった14項目を分析から除外した上で、残りの15項目に対して、再度主因子法・Varimax回転による因子分析を実施した。Varimax回転後の最終的な因子パターンをTable 4に示す。回転前の5因子で15項目の全分散を説明する割合は37.07%であった。この割合は、本学の学生の英語学習に対する目的意識や授業に対する要望をひと括りに説明することの難しさを示している

とも言える。

Table 4 因子分析表

項目内容	I	II	III	IV	V
留学や海外での生活	.56	.07	.03	-.04	-.02
外国人とのコミュニケーション	.53	.06	.06	.00	-.21
海外旅行	.50	.08	.05	.10	-.22
実際に英語を使う活動	.36	.10	.15	.01	-.13
グループ・ワーク	.04	.73	.08	-.07	-.03
ペア・ワーク	.06	.67	.04	-.03	.04
ゲーム(パズルやクイズ)	.15	.40	.04	.01	-.03
英文和訳	-.07	.02	.56	.08	-.05
英作文	.19	.01	.52	.01	-.00
段落・文章の内容の把握	.05	.11	.51	.07	.04
文法	.09	.02	.40	.17	.01
日本語による文法の説明					
明	.05	.01	.13	.87	-.02
日本語による指示・説明	-.00	-.09	.19	.52	-.03
使う機会は全くない	-.29	.04	.03	.02	.86
仕事	.25	.04	.01	.06	-.40
因子間相関					
I	—	.09	.09	.01	-.24
II		—	.06	-.03	.05
III			—	.11	.05
IV				—	.01
V					—

第1因子は4項目で構成されており、実用的な使用目的や活動を望む項目が高い負荷量を示していた。そこで、「実用志向」因子と命名した。

第2因子は3項目で構成されており、学生が何らかの活動に参加することに関わる質問項目が高い負荷量を示していたので、「参加型授業」因子と命名した。

第3因子は4項目で構成されており、読み書きに関わる基礎的な英語能力に関する質問項目が高い負荷量を示していたことから、「英語基礎能力」因子と命名した。

第4因子は2項目で構成されており、教師が授業で日本語を使用することを望む項目が高い負荷量を示していた。「日本語使用希望」因子と命名した。

第5因子は2項目で構成されており、英語を使用する機会がないという項目が高い負荷量で、逆に積極的に使用することにかかわる項目は負の負荷量を示していた。

そこで、「英語忌避」因子と命名した。

3.2 重回帰分析

各因子が授業に対する感想に与える影響を検討するために、重回帰分析を実施した (Table 5)。

Table 5 重回帰分析の結果

	授業の進 め方	クラスの 人数	教科書の 難しさ	教科書の 面白さ	授業外勉強 時間/週
	β	β	β	β	β
実用 志向	-0.03	-0.02	0.06	0.00	0.14**
参加型 授業	0.07	0.09*	-0.05	0.04	-0.07
英語基礎 能力	-0.02	-0.09*	-0.14**	0.01	-0.03
日本語 使用希望	0.10*	0.01	-0.07	0.02	-0.06
英語忌避	-0.04	0.09*	-0.11*	-0.10*	-0.11**

* $p < .05$, ** $p < .01$ β : 標準偏回帰係数

おおよそのまとめとしては、以下のような特徴が指摘できる。

- ・ 実用志向が高いほど、授業外の勉強時間は多くなる。
- ・ 参加型授業を望む学生ほど、クラスの人数が多いとは思わない。
- ・ 英語基礎能力を欲する学生ほど、クラスの人数を多いと感じ、教科書の内容を難しいと感じている。
- ・ 日本語の使用を希望する学生ほど、授業の進め方が早いと感じている。
- ・ 英語忌避の傾向が強いほど、クラスの人数が多いとは思わないが、教科書の内容を難しく、つまらなしいと感じ、週当たりの勉強時間は少なくなる。

いずれも、英語担当教員の日頃の観察からも首肯できるものであるが、同時に、教科書の内容を分かりやすく楽しく学んでもらうための改善であれ、授業内外における学習意欲を喚起するための改善であれ、講じるべき対策は多岐に渡ることを窺わせる。

4. 考察

上の分析を踏まえ、現行カリキュラムに対して、1) クラス編成法の改善、2) 教育内容・教材の改善、3) 学生のタイプと動機づけの考慮の3点に言及し、次年度以降の英語カリキュラムに対する示唆としたい。

4.1 クラス編成法の改善

「授業の進め方」項目の結果は *General Science* 使用3学科でのクラス編成のアンバランスさを、「クラスの人数」項目の結果は学科間のクラス・サイズのバラつきに問題があることを示している。このことは、プレイズメント・テストの結果と重ね合わせるといっそう明確になる。

例えば「英語1」を例にとると、一つのクラスに対して、50点満点で最大23点の分布の幅が存在する。分布のピークは学科によって異なるが、中心をどこに置いて授業を進めたとしても、一つのクラスに20点以上の開きがある学生たちがいれば、進度が遅すぎると感じられたり早すぎると感じられたりするのは無理もないことだと言える。加えて、学科が違うというだけでサイズの大きく異なるクラスに配置されるというのは、授業参加が積極的なものであれ消極的なものであれ、学生にとって納得のいくものではない。重回帰分析の結果から言えば、参加型授業を望む学生に限って言えば、ペア・ワークやグループ・ワークを積極的に取り入れることで、クラス・サイズに対する不満はいくらか解消できる可能性がある。しかし、学部・学科ごとに異なる目標と内容を用意して別の科目として展開するならともかく、同じ内容と到達目標を設定している以上、クラス・サイズが20人以上も異なるという状況は、担当教員の努力でどうにかなるレベルを超えている³⁾。

そこで、改善策として、学科ごとの編成を止め、全学混合のクラス編成を行うことを提案したい。現行と同じクラス数でも、学年全体で10クラスの編成にすれば、学生数の変動の影響を最小限にしつつ、35人以下の均等なクラス編成が可能となる。また、学科横断の編成にすることで、プレイズメントをより実態に即したものとすることができ。データに表れている限りの現状では、上位1~2クラスと下位2クラス、および中位6~7クラスの構成が妥当だと思われる。理想的には——必要コマ数分の人的・物的環境を整備した上で——全て20人程度に統一したクラ

ラスと下位 2 クラス、および中位 6~7 クラスの構成が妥当だと思われる。理想的には——必要コマ数分の人的・物的環境を整備した上で——全て 20 人程度に統一したクラス編成が望まれるが、学生の英語基礎能力に対する要望と、プレイズメント・テストの結果や授業の現況に鑑みれば、下位クラスだけでも（もう 2 クラス程度増やして）20 人以下の少人数クラスを用意すべきだと考える。

4.2 教育内容・教材の改善

教科書の内容に関しては、*Information Technology* が相対的にどのレベルでも難しいと感じられている。ただし、「難しい=つまらない」というわけではなく、全体を通じて面白さに関しては教員間の違いが大きい。複数教員共通仕様の教科書で最も安定しているのは *Guided Reading* である。

テキストに関しては既に改善が行われており、2009 年度は必修英語のテキストの完全共通化が図られることになった。具体的には、上の結果も踏まえ、二年次は全クラスで *Guided Reading* を用い、下位クラスでは 1 を、上位クラスでは 2 をそれぞれ通年で用いる。一年次も、全クラスで *Reading Explorer 1* (HEINLE Cengage Learning) を用いる。もちろんテキストを共通化しただけで何かが解決するわけではないが、少なくとも、これによって各教員の実践の工夫の共有は行きやすくなり、教育内容・教材の検証・改善のプロセスが前進するものと考えられる。

その際、「自分に必要だと思う英語能力」項目において、語彙の不足の自覚が最も顕著であるものの、「文法」の選択率が 1 年生では 7 割、2 年生では 6 割を超えることに対する配慮が必要だろう。当然ながら、各教員は毎回の授業において、テキストやその他の教材を通じて何らかの「文法」を教えている。しかし今回の調査では、質問紙に括弧書きで「動詞の現在形・過去形や who・which・that などの使い分け」という注釈を加えており、そういう知識を少なくない学生が求めているのだということは言える。この結果と所属するクラスの授業内容との因果関係は不明だが、教育内容・教材の検証・改善のプロセスには、科目のカリキュラム・レベルおよび個々の授業レベルでの体系的な文法指導の内容についての吟味が含まれるべきだと考える。

4.3 学生のタイプと動機づけに対する考慮

授業外の勉強時間については教員間の——おそらくは要求される学習スタイルの——違いが大きいものの、総じて言えば、学年が上がると勉強時間も増えている。ただし、毎年同様の結果になるかどうかは分からない。自立した学習者の育成には、どのようなことを考慮する必要があるだろうか。

本調査で明らかになった範囲で学生を類型化するとすれば、大きくは、

- (A) 相対的に実用志向が高く授業外の勉強時間も多い学生
- (B) 少ない人数のクラスでじっくり基礎的能力を身につけることを望む学生
- (C) 学習動機を欠き、極力英語を避けようとする（あるいは投げ出してしまっている）学生

という分類を与えることができる。プレイズメント・テストの分布や授業の成績その他から見ても(A)・(C)は少数で、(B)が最も大きな割合を占めている。いずれのグループも、大勢としては語彙の不足を自覚し、授業での日本語による文法の説明を望んでいる。

永倉 (2006) は、愛知・石川・富山・静岡県内の中高・短・大学生（および中高生の一部の保護者と中高の教員）2,377 人（うち大学生 372 人）を対象とした「英語教育の目的」に関するアンケートを実施し、結果について以下の特徴を指摘している⁴⁾。

- (1) 生徒・学生の年齢が上がれば上がるほど、目的意識は少しずつ薄れている。
- (2) 生徒・学生の年齢が上がれば上がるほど、達成感が薄れている。
- (3) 教員の目的意識に比べ、生徒・学生の意識は低い。
- (4) 達成面については、教員の評価に比べ、生徒・学生の評価は厳しいが、... [中略] ...教員のものと似ており、達成面に対してある程度共通の認識を持っていると言える。
- (5) 教員の目的意識と保護者の期待するものは、... [中略] ...似ている... [中略] ...。某自動車会社の社長交代以降、職場での英語使用が必須条件になったことに象徴される動きに対しては、保護者の方が敏感であることが読み取れる。

(1)-(3)については、大学での学習全般に対して類似の指摘が与えられており、英語に限った問題ではないという側面もある⁵⁾。その中で、今回の調査回答者の約半数が何らかの形で「仕事」で英語を使うことがあると考え、約4割が「海外旅行」での英語使用を意識しているということは注目してよいと思われる。ただし、それは保護者や大学からの影響を含んだものかもしれない、必ずしも自発的な動機とは言えない。上述の(C)タイプの学生、つまり「できれば使いたくないが、おそらく仕事で使わざるを得ない」という消極的な目的意識を持った学生の存在が示唆される。

一方、小杉(2008)は、本学学生に対する学習動機・授業中のつまずき・学習意欲の関連に関する調査を実施し、次の2点を指摘している⁶⁾。

- ・ 学生が大学での学びを楽しいと思うことや将来の展望をもつことは、学ぶ意欲を高めるため、授業中のつまずきを積極的に解決するために重要であり、そのつまずきが自分の努力不足のためであるという原因帰属につながる。
- ・ 学生が大学での学びを義務だと思うこと、やらされていると感じることは、学ぶ意欲の低下につながる。大学での学びを義務だと思う傾向が強いほど、授業中のつまずきに対し、あきらめたり、放棄したりという消極的な対処をする。またこのような傾向が強いほど、授業態度が悪く、教員の授業法に批判的である。

大学入学までに英語学習に対して肯定的な目的意識を形成してこなかった学生に対しては、「仕事で使うのだから…」という動機づけが後者の方向を強める可能性があることは注意すべきであろう。

言うまでもなく外国語の熟達には集中的かつ継続的な努力が必要であり——道具的目的であれ文化的興味であれ——明確な自発的動機に支えられていることが望ましい。脅迫的に強いるのではなく、各教員が教育内容・教材を工夫することにより前者の方向を強めることが、結果的には授業外の学習時間も増やすことにつながると考える。昔から言われるように、「馬を水辺に連れていくことはできても、無理やり水を飲ませることはできない」のである。最終的に馬自身が飲みたいと思わない限り、脅そうがすかそうが——ごく短期的には口をつけたふりをしてくれる

かもしれないが——教育的には無駄である。

永倉(2006)も、高度な英語力が求められる人材に対してCALP (Cognitive Academic Language Proficiency)を養成する必要があることと認めつつ、実用の機会が非常に少なく、英語の必要性をあまり感じていない現状では、BICS (Basic Interpersonal Communication Skills)レベルの日常会話を展開させることを通じて「意味のあるコミュニケーション活動」を行い、人間形成にかかわる英語教育を間接的な目標とすることが重要だと述べている。学生たちが『この授業は、実践的コミュニケーション能力を高め、自分の人間形成にプラスになる』と実感すれば、モチベーションも間違いなく高まる」からである。

註および参考文献

- 1) 方法については、小塩真司(2005)『研究事例で学ぶSPSSとAmosによる心理・調査データ解析』東京書籍を参考にした。具体的な数値等は省くが、クラスのレベル・教科書・教員を被験者間要因、授業に対する感想を被験者内要因として分散分析を行なうと、いずれの要因の主効果も有意であった。交互作用を見ると、レベルは「授業の難しさ」・「授業の面白さ」・「授業の進め方」の違いを、教科書は「クラス人数」・「授業の難しさ」・「授業の面白さ」・「授業外勉強時間」の違いを、教員は、「授業の進め方」・「授業の面白さ」の違いを有意に説明するが、教科書の違いが最も説明力が高かった。
- 2) 固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から言えば、通常は3因子構造が妥当とみなす方が無難だと思うが、今回は質問項目を最大限生かすため5因子構造を仮定した。
- 3) この状況は「英語2」や「英語3」にも——むしろ上下にバラつきを拡大させる形で——引き継がれている可能性が高い。
- 4) 永倉由里(2006)「英語教育の目的は何か：中学・高校・大学の生徒・学生と教師へのアンケート調査から」大塚章夫・三浦孝(編)『英語コミュニケーション活動と人間形成』成美堂, pp. 55-66.
- 5) 例えば、溝上慎一(2004)「大学新入生の学業生活への参入過程：学業意欲と授業意欲」『京都大学高等教

育研究』Vol. 10: 67-87. など。

- 6) 小杉大輔 (2008) 「理工系大学生における学習動機・授業中のつまずき・学習意欲の関連」『静岡理工科大学紀要』Vol. 16: 63-72.

謝辞

調査の実施に協力していただいた英語担当教員と学生のみなさんに改めて感謝申し上げます。また、参考文献の蒐集にあたり、静岡大学教育学部の三浦孝先生と静岡理工科大学総合情報学部人間情報デザイン学科の小杉大輔先生にご協力いただきました。記してお礼申し上げます。

資料

2008 年度学生要望調査質問項目

- ・この科目全体を振り返って答えてください。
 - (1) 授業の進め方はどうでしたか。(1. 遅すぎる 2. どちらかと言えば遅い 3. どちらかと言えばはやい 4. はやすぎる)
 - (2) クラスの人数はどうでしたか。(1. 多すぎる 2. どちらかと言えば多い 3. どちらかと言えば少ない 4. 少なすぎる)
 - (3) 教科書の内容はどうでしたか。(1. 難すぎる 2. どちらかと言えば難しい 3. どちらかと言えばやさしい 4. やさすぎる)
 - (4) 教科書の内容はどうでしたか。(1. つまらない 2. ちょっとつまらない 3. ちょっと面白い 4. 面白い)
 - (5) 授業以外で、週にどれぐらい英語を勉強していましたか。(1. テスト勉強以外はしていない 2. 30分以内 3. 30分～1時間 4. 1時間以上)
- ・今後の英語の授業・学習について聞きます。
 1. あなたはこれから先、どういうことに英語を使う、あるいは使いたいと思いますか。
 - (a) 仕事 (b) 英語の論文・本を読んだり訳したりすること (c) TOEICやTOEFLの受験 (d) 留学や海外での生活 (e) 日本での外国人とのコミュニケーション (f) 英語のホームページを見ること (g) 海外旅行 (h) その他(具体的に記述してください) (i) 使う機会は全くない

2. 英語を学んでいく上で、今の自分に特に必要だと思う知識・技術は次の内どれですか。
 - (a) 発音(単語や文の読み方) (b) 単語 (c) 文法(動詞の現在形・過去形や who・which・that などの使い分け) (d) 英文和訳 (e) 英作文 (f) 段落・文章の内容の把握 (g) コミュニケーション(実際に英語を使う活動) (h) 英語圏の文化的背景 (i) 英検・TOEIC・TOEFL などの資格に役立つ知識・情報・テクニック (j) その他(具体的に記述してください)
3. 英語の担当教員にもっと増やしてほしいと思うものは次の内どれですか。
 - (a) 英語による指示・説明 (b) 視聴覚教材(写真や絵、ビデオなど)の利用 (c) コンピュータを使った学習 (d) 学生が発表する活動 (e) ペア・ワーク(二人一組での作業) (f) グループ・ワーク (g) ゲーム(パズルやクイズなど) (h) 日本語による文法の説明 (i) 日本語による指示・説明 (j) その他(具体的に記述してください)
4. 他に、今後の英語科目・担当教員に対する要望があれば自由に書いてください。